

昭和62年9月23日(木)

第155回

史跡めぐり資料

早稲田・目白台方面



明治の頃の「早稲田たんぼ」と「芭蕉庵」(中央)・目白台(後方)

越谷市 郷土研究会

加藤 幸一

第155回 史跡めぐり

案内場所 早稲田・目白台方面 (新宿区・文京区・豊島区)

と き 昭和62年9月23日(水) 今日「日食」です

集 合 越谷駅前 午前8時40分

東京



11時30分

沖縄県
万座毛



11時25分

コース 越谷駅++++三ノ輪駅---都電三ノ輪橋駅++++面影橋
駅---¹「山吹之里」の碑---²かんせん甘泉園(清水徳川家の
屋敷跡)---³高田富士(高田^{とうしろう}藤四郎が作った最初の
富士塚)---⁴堀部安兵衛仇討の碑---⁵高田馬場跡---
⁶高田藤四郎(富士詣を広めた^{みろくきやうじや}身禄行者の弟子)の墓
---⁷新江戸川公園(熊本藩主細川家の屋敷跡)---
⁸せきぐら関口芭蕉庵(初期の芭蕉庵)---(永^{えいせい}青文庫)---
⁹東京カテドラルの切支丹夜泣石---(田中角栄邸・
目白の女子大)---¹⁰目白不動(五色不動の一つ)の
^{くりにから}俱利伽羅不動庚申塔と丸橋忠弥の墓----¹¹南蔵院(花籠・二子山などの名力士の墓)---面影橋駅

昼食場所 新江戸川公園集会所2階AB室

案内者 越谷市郷土研究会理事 加藤 幸一

表紙の写真は「関口芭蕉庵保存会」編の絵ハガキより転載する

1. 「山吹之里」の碑

面影橋の北詰に「山吹之里」の碑が建っている。貞享三丙寅歳（1686）十一月六日に建てられたものである。そばには山吹（春にあざやかな黄色の花を開く）が1株植えてある。

太田道灌（江戸城を築いたと言われる武将）は文明（1469～86）の頃、江戸城を出てこのあたりで鷹狩りしていると、にわか雨が降ってきたので蓑（カヤ・スケ・わら・シュロの毛などを編んで作った一種のレインコート）を借りようとして、みすぼらしい一軒家に立ち寄った。すると中から出てきた一人の美しい娘は、黙って庭に咲いている山吹の枝を折って一枝を差し出したのである。道灌はこれを見て田舎には珍しい美人だが、口がきけない気の毒な娘と思った。城に帰った道灌は家臣にこのことを話した。ところが家臣はそれは『後捨遺和歌集』にある「七重八重 花は咲けども 山吹の 実の一つだに 無きぞ悲しき」という歌によって蓑（実の）無いことを実の（蓑）無い八重の山吹にかけて和歌で答えたもので、この娘は農家の娘と違って歌の道を知る由緒ある娘が何かの理由でここに住んでいるのだらうと説明した。もちろん口がきけないわけではない。道灌は自分が歌の道を知らないことを恥じ、それ以後この娘（名を紅血という）を江戸城に呼び入れて歌の友としたという伝説が残っている。

このあたり一帯は明治末期まで山吹の群生地であったという。この太田道灌のロマンヌの地、つまり山吹の里の所在地については、実は異説が多く、新宿区山吹町（江戸川橋の南）、町屋駅の近くや神奈川県金沢、埼玉県越生にも伝承地がある。東大久保2-240の大聖院に紅血の墓と称される碑がある。

〔鎌倉街道〕

古くからの道で、古奥州街道の名残。鎌倉に通じる鎌倉街道でもある。面影橋から北方の道筋は、この宿坂をのぼり、鬼子母神、西巢鴨、滝野川、掘船（隅田川南岸）と続き奥州へ。南方は戸山町箱根山下、新宿二丁目の大蔵寺わき、新宿御苑、千駄ヶ谷、渋谷、品川区旗の台、大田区矢口の渡し（多摩川）と続き鎌倉へ向かう。

（p20の宿坂を見よ）

〔江戸川（神田川）〕

ア. 江戸川の川筋

本来の江戸川（旧平川）は、現在の江戸城の平川御門あたりを
通って流れ、神田橋・日本橋をぬけて隅田川へと注ぐ流路であっ
た。

しかし、たびたびの出水さわぎで神田空堀（仙台堀）へ、現在の
飯田橋駅近くで江戸川の水を落すことを考えて通水した。これ
が神田川の起こりである。

現在の地図では、水源の井之頭から始まる川筋を一様に「神田
川」と称している。昭和40年以前の古い地図では、外堀（仙台
堀）より上流を「江戸川」、下流を「神田川」と区別していた。

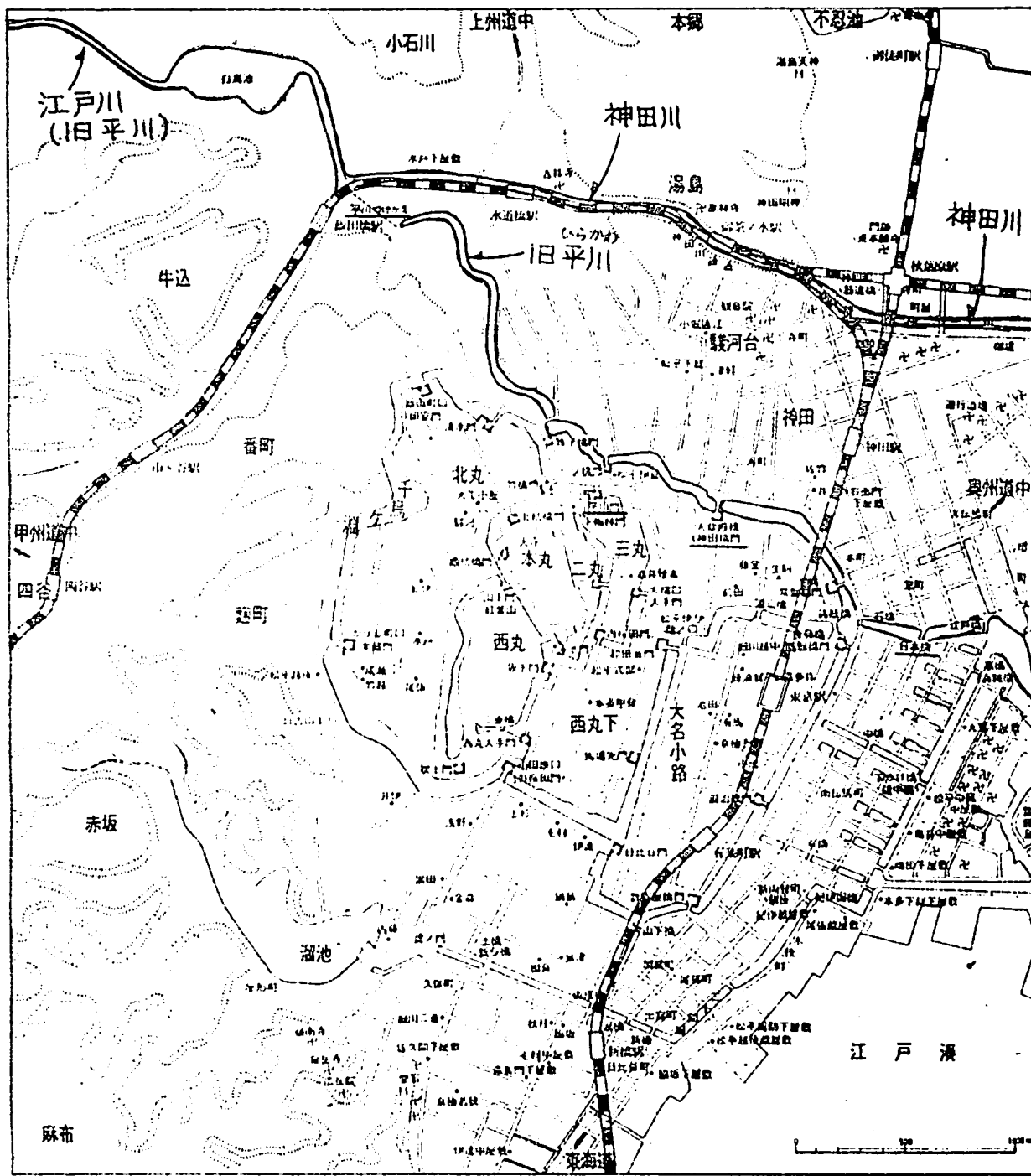
イ. 神田上水

徳川家康の家臣大久保忠行が作ったとされる。忠行は上水開設
後、「主水」（上水が濁って困るというので「もんど」とは叫ばなかった）の名を与えられる（第144回史跡
めぐり資料P15参照）。井の頭池から引水し、善福寺池や妙正寺池
から流出する善福寺川、妙正寺川と新宿区落合で合流して江戸川
になったのである。そしてこれより下流の大洗堰（文京区関口、
駒塚橋より一つ下流の大滝橋あたりにあった）を築いて神田上水
を分派し、さらに関口水道町、小日向水道町、金杉水道町の3町
を通り水道橋に至る。ここから神田川（外堀）を掛樋で渡し、江
戸城内に入る。そして、暗渠で江戸の町々に配水された。（P4を参照）

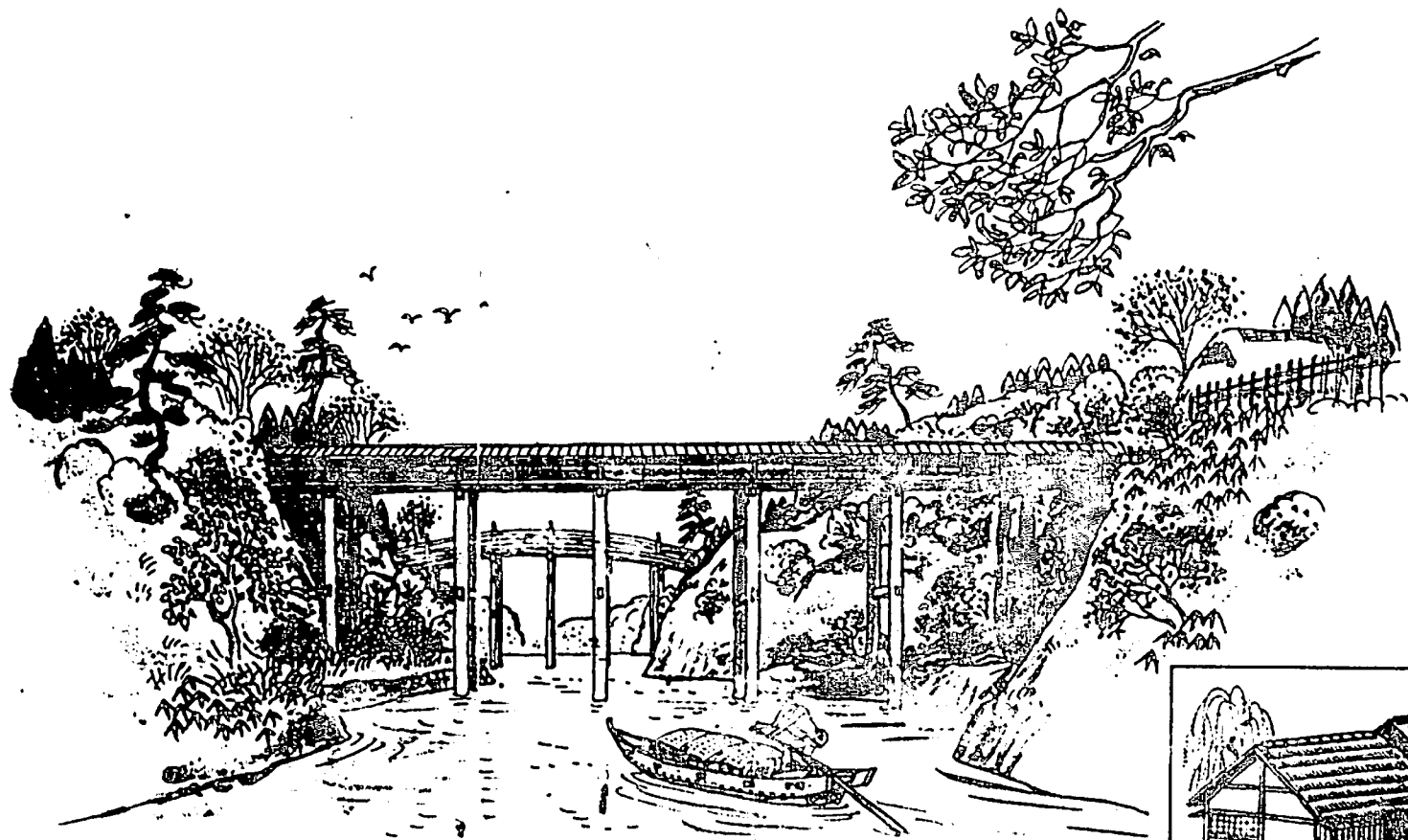
なお、取水地点の
大洗堰（右図）より上
流の江戸川を神田上
水とも呼ばれた。

右図で右の中ほど
に「目白下 大洗堰」と
書かれている。（江
戸名所図会より）





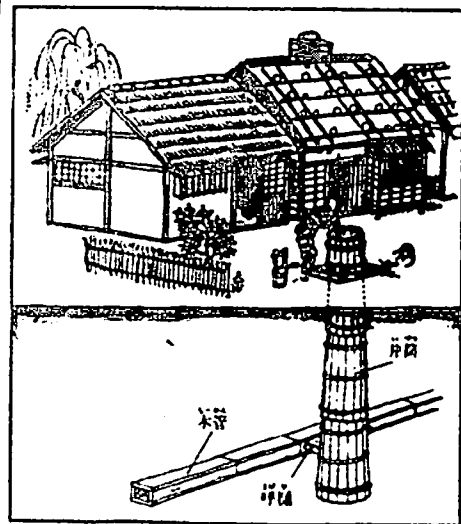
寛永9年(1632)ごろ 『武州豊嶋郡江戸庄図』
 草思社発行「江戸の町(上)」
 より転載



神田川にかけられた上水道の樋

神田川にかけられた上水道の樋（掛樋）

草思社 発行「江戸の町（上）」より



ウ. 江戸川の桜堤

この江戸川べりは護岸施設(土手)をかねて桜の木が植えられ、「江戸川の桜堤」として明治維新以降は花の名所となった。最近桜並木を復活した。

エ. ホタルやサワガニがいた江戸川

サワガニがいて俗にカニ川とも呼ばれた。両岸では砂利が採掘されたりした。

また、面影橋あたりはホタルの名所で、夏の夕暮れなど人々がホタル狩りにたわむれる所であった。このように江戸川はホタルが飛びかったのである。そこで昔をしのんで椿山荘では夏になると地方からホタルを取り寄せて、ホタル観賞のタベを開いている。

オ. 神田川沿いの工業地帯

戦前は、神田川(江戸川)の清流で洗った染め物で栄え、砂利採取場もあり、それらの運搬を請け負う馬方たちで、どの通りも荷馬車の往来がさかんであったという。馬蹄屋もみられた。

戦後、紙工場や製本所、印刷工場が建ち、大正製薬、中外製薬、武田製薬、日本レタリーなどの製薬工場や脱脂綿工場、洋酒の三樂オーシャン(大黒ブドー酒)、オリジン電気、ゾーシン石鹼その他各種の工場がみられていた。この工業地帯は神田川沿いに伸びていて、神田川からは異臭が立っていた。

今は、製本や印刷関連の準工業地帯である。

2. 甘泉園

説明板によると次の通り。

この地は江戸中期の安永3年(1774年)、徳川御三卿の一つ、清水家の下屋敷がおかれたところである。明治30年ごろ、相馬家の所領となったが、昭和13年早稲田大学に移譲された。

甘泉園という名は、園内に湧き水があり、清冽で常時溜れず、また、茶に適したところから起ったものであり、その由来を書きしる

した石碑が、園の南東にあたる水稲荷神社の社務所脇に現存している。戦後、都はこの地を買収し、改修の手を加えて、昭和44年、区へ移管した。

庭園は神田川右岸を東西に走る台地の北西の傾斜地とその低地にあつて、段丘の高低差を利用し、泉の水を引いた池を廻遊する林泉になっている。

池傍より見上げる雄大な常緑樹林に囲まれ、春のツツジ、秋の紅葉が水面に写り、美事な景観を創り出している。

3. 高田富士

ア. 浅間信仰（富士信仰）と浅間神社

富士山に対する信仰に基づいて成立したもので、富士山の霊をまつた浅間神社に関する信仰である。浅間神社は静岡県富士宮市大宮町にある。祭神は木花開耶姫命（浅間大神）を主神とし、瓊瓊杵尊（浅間大神の夫）・大山祇神（浅間大神の父）を合祀する。富士山八合目以上を二神体とする。各地に同名の神社が造られる。

イ. 富士講

浅間信仰の信者たちが寄り集まって作った仲間を富士講という。富士山の登拝を目的とした。享保18年（1733）、富士行者の身祿が富士山七合五勺の烏帽子岩の岩窟で断食し、入定すると、庶民を救おうと食を断って死んだ身祿に感動する人々の間に、富士講が急増し、広まった。

信徒は夏に白衣を着て鈴を振り鳴らし「六根清浄」を何度も唱えながら富士山に登山し祈願した。富士講は特に江戸とその周辺の町人や農民の間に爆発的に広まり、俗に江戸富士「八百八講」とまで呼ばれるほどたくさんの富士講ができた。

ウ. 富士塚

富士講の人たちが本物の富士山をまねて築いた塚を富士塚とい

水 稻 荷 神 社 のパンフレットより

御鎮座地 東京都新宿区西早稲田三丁目五番四三号

甘泉園(旧徳川御三卿清水家下邸跡)

御祭神 倉稻魂大神

伊勢神宮の神様と御同体で、すべて人々の衣食を守られ生活を豊にして下さいます

佐田彦大神

道路を守る神様です。交通・旅行の安全又開運を御守り致します

大宮姫大神

住居を御守りする神様です。人々の和合が叶えられます

御祭日 初 午 祭

旧暦二月初午の日に言い初午開運守を差出します又東京では例の少いオビシヤを今も行って居ります

富士祭

七月二十三日より二十五日まで境内の富士浅間神社で行います

江戸時代から有名な祭で麦ワラの蛇を出し大変ににぎわいます

例大祭

九月七日より九日まで境内露店でにぎわい、いろいろ催物があります

冬至祭

十二月冬至の日此の日から一陽米復守を授与します

御由緒

天慶四年(皇紀一六〇一年) 鎮守府將軍藤原太秀郷朝臣が初めて旧社地

(現境内地南方凡そ三百米)の富塚の上に稲荷大神を勧請されました

初めは富塚稲荷又は將軍稲荷と呼ばれました

文龜元年(皇紀二一六一年)川越管領上杉治部少輔朝良朝臣が夢に一老翁

を見ました

老翁は「我此所を守護し民をして太平の化を蒙らしめ所を繁榮ならしめんとす汝必ず民を虐ぐる事勿れ」と言はれましたので朝臣が「翁は如何なる人にましますぞ」と問えば「天の戸を開きて江戸に稲荷なる富塚の里にいくよへにけり」と答えて夢がさめました

時に庭前に一老狐が居り朝臣を顧みて江戸の方に飛び去りました

朝臣は直ちに家臣をして江戸、戸塚の辺りを探させました処、戸塚音信山

に稲荷の古社があり、又社側の古塚に白狐が年久しく住んでいる事がわかりました。朝臣は直ちに社頭を造営し戸塚一円を社領に致しました

天文十九年(皇紀二二一〇年)牛込主膳正時國が社頭を造営致しました

天和二年(皇紀二三四二年)佐藤駿河守信次が社頭を造営しました

元禄十五年(皇紀二三六二年)四月神主の夢想により大棟の下に盞水が湧

き出しました。時に江戸市中眼病を患うもの多く諸人困難しましたが、此

の盞水によって治った者が沢山ありました

又其の節の御神託に「我を信仰する者には火難を免れしむべし」とあり此の事から世に水稲荷と称し奉り消防関係者、水商売の人達は特に参詣しました。当時は信仰範圍甚だ広く現に伊勢国飯高郡の人の納めた石灯籠が残

って居ります。天明八年（皇紀二四四八年）京都大火皇居炎上の際しきりに防火につとめる老翁があり遂に天眼に留り名を問われた時「江戸の水稲荷」と奉答して姿を消しました。

この時の恩賞に關東稻荷惣領職を賜はったと伝えて居ります。

明治十七年村社に列せられました。昭和二十年五月戦災により社殿炎上に及びました。此の時天然記念物になって居りました神木大棟が焼け鹽水が止りました。氏子の方は大部分戦災より免れましたので一同協議して直ちに再建に着手し翌年末、資材不足を克服して木造二十五坪の社殿を新築しました。都内戦災神社復興の第一番でありました。

昭和三十八年七月廿五日現社殿に御遷座になりました

数年前より旧社地が戦災の後漸次荒廃に趣き御神木も焼け枯れ神水も止りました。二十一年再建の御社殿も十有余年の歳月に損じて参り更に社大に御造営の計画を立てました所はからずも早稲田大学より甘泉園に三、四六二坪の土地を提供し且御社殿を奉納するから旧社地二、〇六〇坪余をゆずり受けたいと申出があり調査・審議の末、是れを決定致しました
現在地は徳川家御三卿の一たる清水徳川家の旧趾で都内希なる名園甘泉園の一部であります

境内社 (省略)

境内名勝 (一) 甘泉園

境内並に隣接庭園を甘泉園と云います。現に甘味ある泉が湧き出して居ります

(二) 山吹里

太田道灌で名高い山吹の里は此辺一帯を云う名であります

(三) 窟塚

神社背後の小丘は窟塚であります。元の境内にありましたものを御遷座に当りこゝに移しました。戸塚町の名の起りです

(四) 狐穴

全国でも珍らしい大規模の御穴です。これは旧社地からそのまま御移し致しました

(五) 富士山

安永九年先達日行藤四郎翁が築いたものです。

江戸の人造富士中最古最大のもので、今度旧社地よりそのままの型で引き移しました

(六) 聴松亭

玉垣外の茶室で徳川家の遺構です (以下省略)

う。富士山の山はだに似せるため、富士山から溶岩を運び、形を富士山に似せて造り上げた。山開きは6月1日（新暦では7月1日）である。

工. 高田富士

この富士塚を最初に造った人は、江戸の高田に住んでいた高田藤四郎（身禄行者の弟子）である。安永9年（1780）、高田水稲荷神社の境内（現在の早大の9号館あたりにあった）に、本業の造園技術を生かして築いた、これが富士塚の始まりである。この高田富士は早稲田大学の拡張工事（9号館建設）にともなって、昭和40年に現在地に移されたのである。「胎内くぐり」が今でも残っていて、毎年7月23日より25日まで富士祭がおこなわれ、表わらの蛇が売られ、にぎわっている。

〔高田馬場の流鏝馬〕

高田馬場の流鏝馬は吉宗が享保13年（1728）に行ったのが始まり。平安期から続いてきた流鏝馬も戦国時代を経て廃絶していたのを復興したもの。元文3年（1738）からは将軍家の吉例の行事となる。しかし明治維新と共に馬場もなくなり、自然中止の形となった。

（高田馬場の場所についてはp9を見よ）

それが昭和39年になって水稲荷神社の参道で毎年10月10日におこなうようになった。41年には区の無形文化財に



水稲荷の流鏝馬で 脇を披搭する斎藤直孝宮司

指定される。しかし、昭和55年より、春（4月の第4日曜日）は水稲荷、秋（10月10日）は穴八幡主催で年に2回分裂しておこなわれるようになった。穴八幡神社は高田馬場流鏝馬が奉納された神社。

本来の流鏝馬は三つの的を並べて次々に射ていくのだが、両方の会場（水稲荷は水稲荷の参道、穴八幡は都立戸山公園）とも狭いので一の的、二の的のみで行う。

安兵衛は仇討ちから7年後に起きた「松の廊下事件」では、早くから「吉良討つべし」の強硬論を唱え、四十七士の中の急進派リーダーと言えよう。主君浅野内匠頭長矩(ながのり)(赤穂藩主)死後、大石良雄らの吉良邸討ち入りに参加する。

5. 高田馬場跡

説明板より(新宿区教育委員会)

西早稲田三の一、二、三から十四あたりを含む長方形の土地が、江戸時代の高田馬場である。馬場は寛永十三年(1636)につくられたもので、旗本たちの馬術の練習場であった。

また、穴八幡に奉納するために催された流鏝馬などが行なわれ、将軍の供覧に入れたところでもある。

享保年間(1716~1735)には馬場の北側に松並木がつくられ、八軒の茶屋があったとされている。百姓が人出の多いところを見て、茶屋を開いたものと思われる。

また、馬場跡の一角、茶屋町通りに面したところには堀部安兵衛が叔父の菅野六郎左衛門の仇を討ったところだともいわれている。

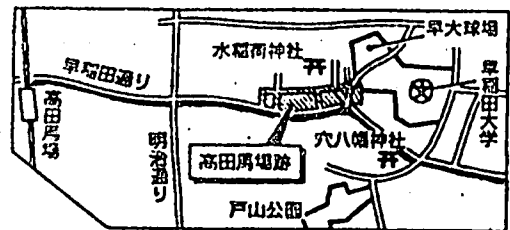
水稲荷神社の境内には「堀部武庸加功遺跡」の碑が立っている。

昭和五十四年三月 東京都新宿区教育委員会

高田馬場は幅約50m、長さ約350mの細長い長方形の形は今も道路区画に名残りをとどめている。すぐ近くの穴八幡に奉納する流鏝馬は、若君誕生の折などに盛大に行われたのである。この茶屋には雑司谷(ぞうしがや)の鬼子母神へ参詣する人たちも多数立ち寄ったと言う。馬場は明治4年の秋に畑にされ、桑や茶が植えられ、松並木も年ご



松並木と北側の茶屋が名物だった高田馬場 (江戸名所図会)



都^{みやこ}の西北、早稲田の森に大学ができたのは明治15年で、創立者は大隈重信。当初は東京専門学校と呼ばれ、明治35年に早稲田大学となった。この江戸川にそった低地は大学ができる前までは一面の早稲田田んぼ。コメとワセダミョウガが名物、学校ができてから急激に市街化していった。

6. 高田藤四郎の墓

江戸の高田に住む藤四郎は、丸藤講^{まるとうこう}を組織し、師である身禄行者^{みろくぎょじや}を追慕する記念に当時の水稲荷の境内に富士の築山を造った。形は富士山五合目以上の姿に模して全山を甲州杉^{ぼうく}(富士熔岩)で包み、富士の岩肌を表現した。山頂近くに烏帽子岩^{えぼし}をまわった白い巨石を置き身禄^{みろく}が入定(死)した所を示した。高さは5mほどの小山であるが、延べ数千人の講員が無償協力して「富士の写し」を完成したのである。朱楽菅江^{あけら かんこう}が『大抵御覽』^{たいてい ぎらん}を著わして世にひろめたので、一躍江戸の名物となり、老人・子供・足弱者・女人など富士へ行けない人びとが、お山にあやかりたいと集まった。これが富士塚の初まりである。

その藤四郎の墓は当時の高田富士のすぐそばの宝泉寺にある。現在墓地入口右上に「日行」^{にちぎょう}と刻まれた墓石がある。藤四郎の法名^{ほつみやう}である。

〔富塚古墳と高田富士〕

宝泉寺本堂裏に早稲田大学9号館(法商研究室などあり)がある。もと宝泉寺境内の一部で掘り下げて建てたもの。その建物の中央より西側に富塚と呼ぶ古墳があった。この古墳から地名の戸塚が生まれたと考えられている。富塚は古墳時代後期のものと言われ、形式は前方後円墳と思われる。この古墳の後円部分の石郭を利用したと見られる洞窟(狐穴)には小稲荷が洞ってあった。そこには狐が住んでいたと言われる。古墳の前方部分は富士信仰の富士塚に作りかえられていた。宝泉寺本堂からみるとものすごく高い塚に見えたという。古墳の東ふもとには水稲荷神社があった。現在の宝泉寺墓地あたりは水稲荷の境内地であった。水稲荷の近くに「蛇

の口」や「いもりの池」(古墳東の低地)があり、富士信仰の人たちが滝にうたれたり、池で水ごりを取り、白装束しろまぶくに身をかためて高田富士に登り、実際の富士登拝した気分を味わったのであろう。「都の西北、早稲田の森」の森とはこのあたり一帯をさしたのである。

ところが、付近一帯は早大に購入され、富塚古墳は崩され、木稻荷と富士塚と狐穴は西方の甘泉園に昭和40年1月までに移されたのである。

〔水神社〕(駒塚橋そば)

天正(1573~92)の末、井の頭池から神田上水を引いた時、水道取り入れ口の大洗堰を設け、ここに水神社をまつたものとされる。水神社の前の橋が駒塚橋で、その下はかつては川原の砂利採取が盛んな所であった。そのため、大洗堰と砂利採取でこの周辺の出水さわぎはさらに大きかったと思われる

説明板によると次の通り。

祭神は はやあきつひのミコ速秋津彦命・速秋津姫命・応神天皇。創建の年代は明かでない。『江戸砂子』には「上水開けてより関口水門の守護神なり」とある。

わが国最古の神田上水は徳川家康の命により、大久保主水もんどが開いた。井頭池からの流れを、目白台下の現大滝橋のあたりに、堰(大洗堰)を築き、水位をあげて上水を神田、日本橋方面に通じた。

伝之によれば、水神が八幡宮社司の夢枕に立ち、「我 水伯(水神)なり、我をこの地に祀らば堰の守護神となり、村民を始め江戸町ことごとく安泰あんたいなり。」と告げたのでここに水神を祭ったという。

上水の恩恵にあずかった神田、日本橋方面の人たちの参詣が多かったといわれる。また、このあたりは田園地帯で、清らかな神田上水が流れ、前には早稲田田んぼが広がり、後には目白台の椿山つばきを控え、西には富士の姿も美しく眺められて、江戸時代は行楽の地であった。

昭和58年3月 文京区教育委員会

7. 新江戸川公園

文京区立新江戸川公園 (目白台1-1)

江戸時代ここは、武家地として大名屋敷であったが、幕末には細川越中守の下屋敷(本邸の上屋敷に対して控屋敷、火災などの災害時の避難場所でもある)、抱之屋敷(百姓地を買入れ屋敷とする)となった。そして明治15年(1882)からは細川家の本邸となった。

昭和25年に所有者が変わり、同34年に東京都が買収して、都立公園として開園した。昭和50年4月、文京区に移管され、文京区立新江戸川公園となった。

庭園の規模は比較的小さいが、素林さの中に、江戸時代の純日本式武家庭園の面影をとどめる貴重なものである。この庭園の特色は次の通りである。

- ① 目白台の地形の変化を巧みに利用して、台地を山とし、その南斜面を生かして立体的な眺望をもっている。
- ② 回遊式泉水庭園である。遊歩道の一部は、目白台を利用した尾根道または踏みわけ道のようになっている。
- ③ 平安時代の貴族の寝殿造にみられる『遣り木式』の形式をとっている。ローム層の台地の湧き水を細流で池に取り入れ、その流れに沿って野草をあしらっている。

公園内の建物は、松声閣という、明治20年頃の建造で、細川家の学問所(家族の勉強するところ)であった。

南面には神田川が流れている。これはかつての神田上水である。ここから少し下流の現大滝橋あたりに、関口の大洗堰があった。この堰で上水を分流して、余った水を流した。この堰の少し上流あたりから船河原橋までの外濠までを江戸川と呼んだ。昭和40年新河川法が施行されて、井の頭の水源から隅田川までを通して神田川と呼ぶようになった。

文京区教育委員会 昭和56年9月

カテドラル

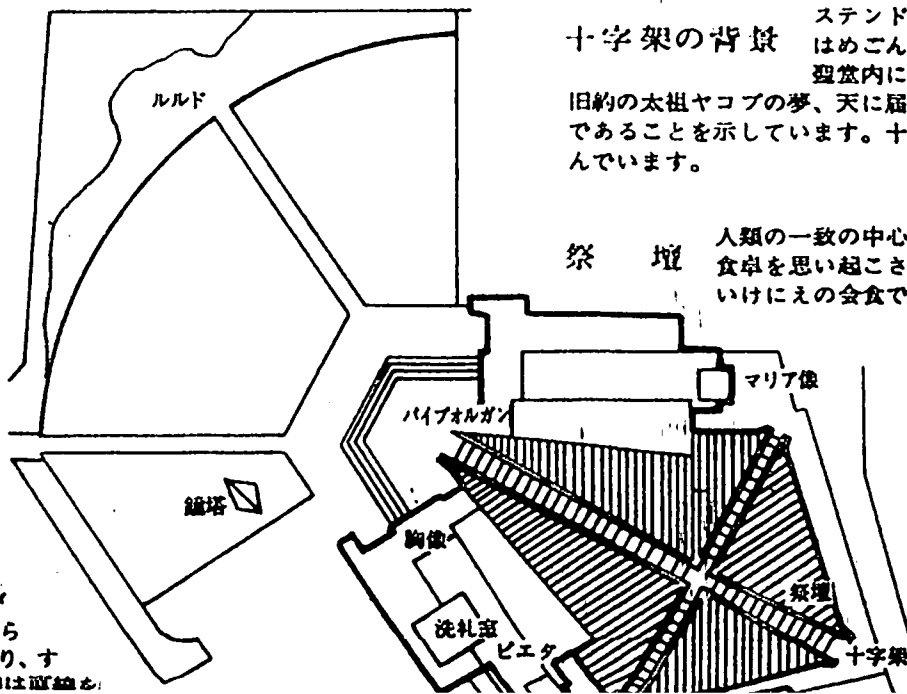
とは、「カテドラ」のある教会のこと。カトリック教会には、教会の行政、司牧のための地域的区分があり、それを「教区」と呼びます。(日本は15の教区に分かれています。)それぞれの「教区」には教区長である司教または大司教がおります。この(大)司教が、自分の教区内にいる信徒を教え、導き、儀式を司式するための「着座椅子」をギリシャ語で〈カテドラ〉といいます。(祭壇左手にある紋章のついた赤い座がそれです。)昔から、この言葉は教授、判事の席を意味しており、のちには講座そのものをいうようになりました。つまり、権威をもって教えるという意味です。〈カテドラ〉すなわち司教座のある教会を「カテドラル」、司教座聖堂といいます。東京教区の司教座聖堂ですので「東京カテドラル」と呼ぶわけです。カテドラルは、いわば教区の(母教会)といえるもので、長である東京大司教が公に儀式を司式し、教え指導する教会なのです。教区全体の行事、集会もここで行われます。

ルルド

今から約百年前、フランスのルルドという片田舎の洞窟にマリアがあらわれるという奇跡がありました。マリアに対する信心から、フランス人の宣教師によって、その洞窟そっくりにつくられたのがこの〈ルルド〉です。フランスのルルドは今では全世界から多くの信徒が訪れる有名な巡礼地となっています。

鐘塔

高さ61.68メートルHPシエル構造の鐘塔で、φ500mm×9mm×40mの鋼管パイプを支持杭として使用するというように基礎工事に苦心がはられました。4つの面は一見平らに見えますが、双曲抛物面をしており、すべておぼろげです。4つの鐘は直線と



と廻響にあるように、神がすべての人のほんとうの心の拠りどころであることを示すものです。大きく手を広げたようなそのさまは、

「すべて労苦して、重荷を負っている人たちよ。わたしのもとに来なさい」
(マタイ11・28)

と招いているかのようです。

大十字架

高さ17メートル。希望と堅忍をあらわす十字架は、神との交わり(縦)、隣人との交わり(横)とが、天国への道であることを示しています。十字架は、キリスト者のシンボルとして、キリストによる救いを語りかけています。十字架にかけられている輪は、キリストによるめぐみが、全人類におよび、全世界を包んでいることを教えるものです。

十字架の背景

スタンド・グラスではなく、アラバスト大理石をはめこんだ梯子状の窓は柔らかな光を祭壇背後から聖堂内に投げかけています。神の幕屋の蓋となった旧約の太祖ヤコブの夢、天に届く梯子を思わせ、聖堂が神の家、祈りの家であることを示しています。十字架は世を照らす光として、光の線をきざんでいます。

祭壇
人類の一致の中心であるキリストをかたどり、最後の晩餐の食卓を思い起こさせます。キリスト者は、この食卓をかこみ、いけにえの会食であるミサの祭式を全員で行います。この祭壇は、イタリアから取り寄せた大理石で作られています。階段によって高くなっている部分を〈内陣〉といいます。そこには、祭壇、朗読台、司式者席が設けられています。これは、キリストが今も、祭儀の中に、聖書のみ言葉の中に、座長である司式者の中に、おられ、私たちとともにいましたもうことをあらわすものです。

マリア像
正面に向かって左側にある祭壇の像は

なして、空に向かって伸びています。この鐘は西ドイツから輸入されたものですが、制作者は、日本各地の鐘の音色を研究し、日本的な音色を出す苦心をしました。鐘の音は、神に向かって祈れと語りかけ人々をここへ招き寄せます。

パイプオルガン 大小の多数のパイプに風を送って、美しい音色を出すオルガンで、教会用パイプオルガンとしては、日本で最大のもので、宗教音楽は、合唱とともに、私たちの心、気持ちを神に訴えるもので、折りでもあります。声を出して唱える声、心で念ずる黙禱と同じように、神に語りかける祈りの仕方の一つなのです。オルガンの美しい音色は、私たちの心を天に向けさせるのを手伝い、宗教的な清らかな雰囲気をもももしてくれます。このパイプオルガンは、オランダ製で、この建築に合わせて特別に制作され、パイプのストップは48個及び三つの手鍵盤と足鍵盤があります。

洗礼室 聖堂の右入口から入って、正面の仕切りの裏にある広間が(洗礼室)です。洗礼は、キリストの教えを受け入れ希望するものに授けられる儀式で、過去の一切の汚れを清め、神の子となり、教会の一員となるめぐみを与えるものです。この洗礼室の天井にひらかれている明り取りからの光は神からの光に照らされて信仰に導かれること、受洗者に神のめぐみが豊かに注がれることを示しています。

聖堂 高さ39.4メートル。八面の双曲拋物面を垂直に近く立てた構造は、一大十字架形をかたちづくっています。外装のステンレス張りの輝きは、社会、人心の暗闇を照らすキリストの光を思わせるものです。プレキャスト石張りの周壁は、
「主はわが岩、わが城、わたしを救うもの」 (詩編18:2)



の聖堂は聖マリア大聖堂と呼ばれマリアを保護者にいただいています。マリアは神より選ばれ、キリストの母となられた方です。キリストは、ご自分の母、マリアを、すべての人の心の母として、私たちに与えてくれたのです。マリアを通してキリストへ。キリストによって神のみもとに導かれるとの考えが、多くのキリスト者の中に行き渡っています。マリアの子ともである私たちは、マリアにあやかって、キリストの兄弟となり、神に近づくのです。

聖フランシスコ・ザビエルの胸像 聖フランシスコ・ザビエルは1549年(天文18年)わが国にはじめて西欧文化を伝えた宣教師です。これはフランス国王ルイ13世の母君マリー・ド・メディチスが1642年ドイツのケルンのイエズス会へ寄贈したもので、1966年当カテドラル大聖堂の落成に当って、フリings枢機卿により当所に寄贈されました。作者不明。

ピエタ ピエタはキリストが人類救済のために十字架上で死去された後、御母マリアがそのご遺骸を膝に受けて、ご苦難のあとをしのび、その限りない愛を瞑想する姿を現したものです。原像はバチカン市国サン・ピエトロ大聖堂にあり、ミケランジェロの傑作として広く世界に知られています。高さ175センチ、重さ2,600キロ、原像と全く同大で、1970年日本文化財団の依頼によりフィレンツェのリド・ボベッキ教授指導の下に作成され、1973年8月、同財団から当カテドラル大聖堂へ寄贈されました。

パンフレットより

東京カテドラル聖マリア大聖堂は外壁がステンレス・スチール張りの超近代的な建物である。東京大学の丹下健三教授らが設計を担当して昭和39年に建てられた。空から見ると建物全体が十字架に見えるようになっている。

8. 関口芭蕉庵 (非公開)

松尾甚七郎宗房(1644~94)は伊賀上野に生まれ、号を芭蕉といひ、江戸前期の俳人である。

宗房は延宝元年(1673)30歳で江戸に出て普請方の松村市兵衛の紹介で伊勢国の津城主の藤堂家の下級武士となる。そして家臣として神田上水堀割工事に従事することになるが、延宝5年~8年(1677~1680)の間に彼が住んだ所がここであると伝えられている。

芭蕉がここで「五月雨に かからぬものは 瀬田の橋」という句を作ったことから、没後その追善に建てられた『さみだれ塚』がある。瀬田とは近江八景の一つ「瀬田の夕照」の瀬田をさし、早稲田たんぼを琵琶湖に見たてた句であるという。

延宝8年(1680)37歳の時、深川六間堀の深川芭蕉庵に移る。深川芭蕉庵に関することは 第121回史跡めぐり資料 p14・15・19・20 を参照のこと。

関口芭蕉庵

文京区 関口ニ丁目 11-3

江戸前期の俳人。松尾芭蕉(1644~1694)は、延宝5年~8年(1677~1680)神田川改修工事に何んらかの形で参画し、改修工事期間この地「竜隠庵」に居住したと伝えられているところから世人は関口の「芭蕉庵」と呼んだ。

享保11年(1726)芭蕉の33回忌に当たり芭蕉の像を祀る芭蕉堂の建設となり、さらにその弟子の其角・嵐雪・丈草の像も安置するようになる。

さらに寛延3年(1750)宗瑞・馬光らの俳人が芭蕉自筆の「瀬田の橋」の短冊を埋めて墓とし「さみだれ塚」と称した。

芭蕉庵の建物は昭和13年3月近火で類焼、同年8月復旧再建されたが昭和20年5月の戦災で焼失した。しかし敷地内には往時をしのぶ芭蕉堂・さみだれ塚・朱紫菅江歌碑、芭蕉翁、伊藤松宇の句碑などが現存する。文京区教育委員会 昭和49年10月

〔胸突坂〕

名前の通り胸を地面に突くような急傾斜の坂道である。両側には右は野間家講談社社長邸（関口芭蕉庵の敷地も含む）、左は熊本の殿様、細川邸となっている。以前はここから富士山が見られた。

〔永青文庫〕 月・水・金の13:00～16:00に限り開館。8月閉館

永青文庫

(目白台1-1-1)

この地は、中世室町幕府の管領家の一門であり肥後熊本54万石の大名であった細川家の下屋敷跡である。細川家がここに入ったのは幕末で、当時は3千坪であったが、その後少しずつ拡張し、新江戸川公園・永青文庫を含む神田上水から目白通りに及ぶ約3万8千坪の広大な敷地であった。

永青文庫は、南北朝時代から現在に至る歴代細川家25代の間に蒐集された細川家の歴史資料や文化財、及び24代護立氏が蒐集した近代日本画、中国の考古品、陶磁器などを以って昭和25年に設立された。

昭和47年に登録博物館となり一般に展示公開されている。

文京区教育委員会 昭和62年3月

ここ目白台1-1-1は、旧熊本藩主細川邸である。故16代目細川護立氏(昭和45年死去)は当時、地元の古い人たちにとっては近よれかたき存在で『殿様』と呼ばれていた。現17代目は、近衛文麿の秘書を務めたこともあるという護貞氏である。

なお、目白通りに面した土地は、細川家が明治39年に建てた長屋のあった所で、戦後、細川家から払い下げを受けた地域。

〔目白通りと目白台の武家屋敷〕

この目白通りは、その名の示すように目白台地の背を走り、奥は落合、練馬、石神井を経て清瀬市内の清戸となる。かつては「清戸道」といい、前記の村々の農民が朝早く農作物を江戸に運び、帰路は江戸の下肥を持ち帰った道である。俗に「おわい街道」とも呼ばれた。

しかし、このあたりは眺望のよさと閑静な土地がらと江戸城に近いこともあって、江戸時代は武家・大名の屋敷地となり、安政4年(1857)の雑司ヶ谷音羽絵図を見ても黒田(現在の橋山荘)、細川、小笠原、大岡、土井などの下屋敷となっていることがわかる。明治維新後は、明治の元老である山県有朋(現在の橋山荘)などが住む別荘地帯として静けさを保っていた。

9. 東京カテドラルの切支丹夜泣石

東京カテドラルの左奥の樹かげに切支丹夜泣石がある。文京区小日向一丁目の切支丹坂の上り口にあったものをここに移したのである。この石は八兵衛石ともいわれ、もとは切支丹屋敷の正門前にあったものだという。八兵衛はこの切支丹屋に捕えられた切支丹の信者の一人だが、幾度かの拷問にあってもついに信仰を捨てなかったという。それだけに八兵衛の処刑はむごたらしいもので、見せしめのため生き埋めにされ、その上にこの石を置いたのだという。近所の子供が石をたたいて「八兵衛苦しいか」と聞くと、石が動いたという話さえ伝わっている。

※切支丹屋敷 (キリシタン坂をのぼりきったあたり)

島原の乱の戦功によって江戸幕府の初代宗門奉行(宗門改め役)に就任した井上筑後守政重が、ペドロ・マルケスら集団潜入してきた宣教師たちを取り調べるため、正保3年(1646)に自



らの下屋敷を改造して開設した。当初24,000m²ほどあったが、元禄時代に9千m²に縮小。屋敷内には、牢獄、番所の他、パレレンの遺物や書類を収める倉庫などがあった。最後の囚人がシドッチ。新井白石が審問し、これをもとに西洋の歴史、地理、風俗などを鎖国の世に紹介した「西洋紀聞」を著す。シドッチは正徳4に死亡。切支丹の衰退に伴い、切支丹屋敷は寛政4年(1792)に廃止。

ルルドの洞窟

ルルドはフランスの西南・ピレネー山脈の奥地にある町です。今から凡そ百二十年前（一八五八年）キリストの御母聖マリアが、町はずれの洞窟で、ベルナテツタという少女にお現われになつて、世界の人人の改心のためまた平和のために祈るようにおすすめになりました。そして、そのあかしとして、霊泉がわき出て、その水を飲み或はそれに浸つた人たちのうちに、不治の病が完全になおるといふ奇蹟が行われ、今日もなお続いております。教会は厳正な科学的調査の末、一八六二年その事実を認め、そこに教会を建てて人人の参詣をゆるしました。現今の巡礼期には全世界から一日に七万ないし三十万人の参詣者が集るといふことです。この洞窟は実物と全く同じ大ききで、一九一一年（明治四十四年）仏人宣教師ドマンシエル神父が建てたものです。

（説明板より）

〔和敬塾〕

昭和30年、東京深川の前川喜作氏が私財を投じて作った学生寮。塾生（寮生）は土地柄、早大生が多い。敷地は元は細川家の土地。塾内に細川本館や細川家女中宿舎（塾職員宿舎に使用）が残っている。

〔田中角栄邸〕

田中角栄の私邸。田中角栄は佐藤栄作内閣の退陣により、自民党総裁となり組閣（1972.7）。日中共同声明を発して日中復交に力を尽くす。列島改造をかかげると物価高騰がはげしく、内閣総理大臣在職中、金脈問題（ロッキード事件）を起し、退陣（1974.12）。

〔目白の女子大〕

現「日本女子大」は、女子高等教育の学校として明治34年（1901）にわが国で最初に開校した大学。敷地内にある成瀬^{なるせ}記念講堂は創設者である成瀬仁蔵を記念したもので、明治38年に当時の森村財閥の寄付で建築された。当時としては最新式の西洋建築による講堂で、西洋教会堂の基本形式をふまえながら西洋中世貴族の邸館における大ホール形式を加味した漸新的様式をうかがうことができるという。

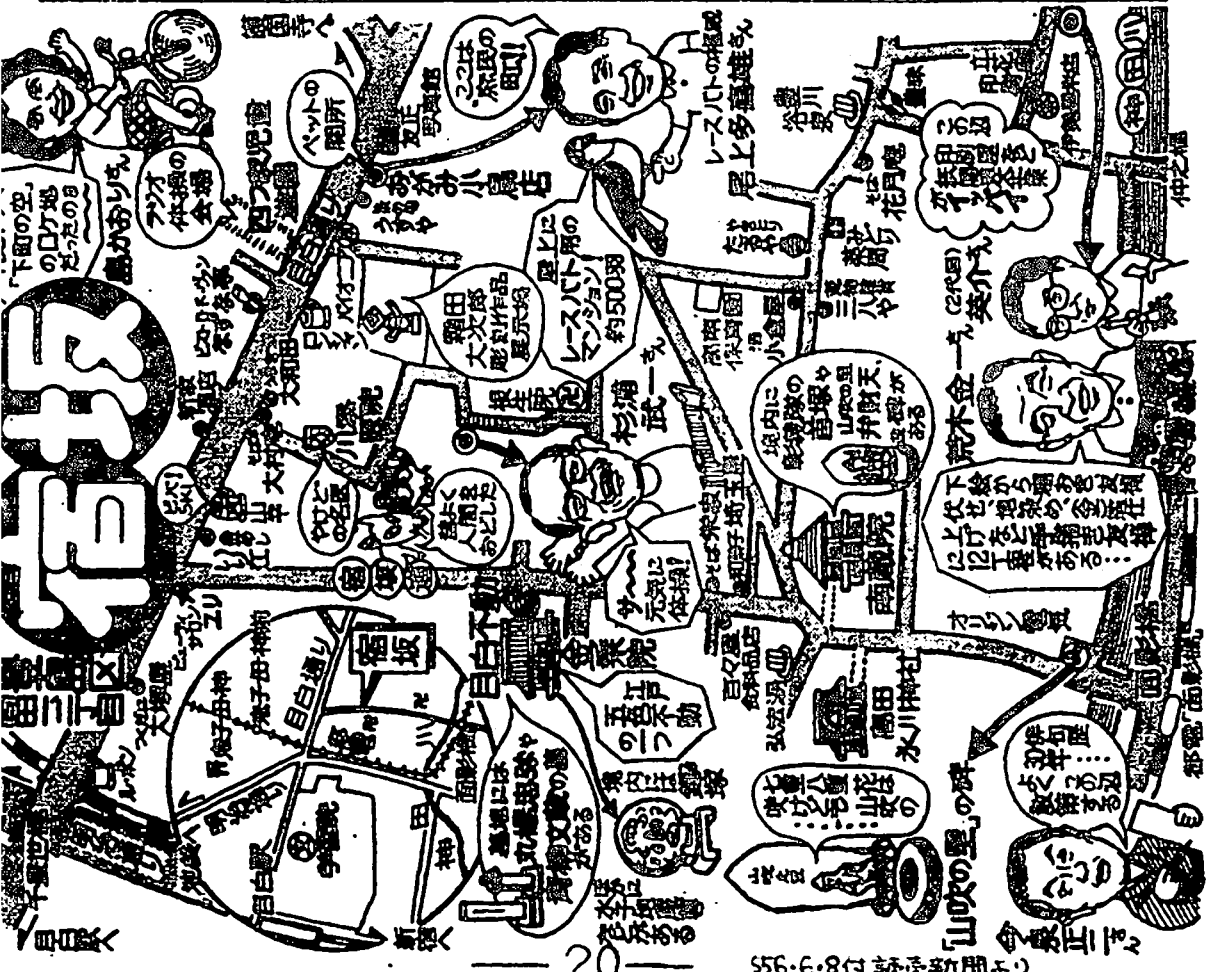
しほくさかみち
宿坂道

中世の頃“宿坂の関”と呼ばれる所が、このあたりにあった。この坂の名が、宿坂道と残っているのは、おそらくそれにちなむものと思われる。

“宿坂の関”は鎌倉街道の道筋にあったものといわれ、したがって、ここ宿坂はその街道上の地名と考えられる。古地図によると、鎌倉街道は現在のこの道より、やや東寄りに位置していたが、一応ここも鎌倉街道の名残りといえよう。

今から三百年ほど前、このあたりには樹木が生い茂り、昼なお暗く、くらやみの坂道として狐狸の類がとびはねて、通行人を化かしたなどという話もいまに伝わっている。

昭和50年3月 豊島区教育委員会



10. 目白不動

江戸の五色不動の一つに数えられた目白不動は、目白坂の中腹にあったが、幕末ごろから衰退し、昭和20年戦災により廃寺となった。本尊の目白不動尊像はここ金乗院に移されたのである。

江戸五色不動とは、上野寛永寺を創立した天海僧正が江戸城の守りとして、目青(目黒区三軒三丁目)、目黄(台東区三ノ輪二丁目)、目赤(文京区本郷一丁目)、目白、目黒(目黒区三丁目)の5つを設定した五不動である。密教で五色は地・水・火・風・空の五大に配当されている。

目白不動 金乗院

金乗院は、真言宗の寺院で、開山の永順が本尊の聖観音を勧請して観音堂を築いたのが草創とされ、永順の死は文禄三年(1594)六月であるからそれ以前の創建である。当初は蓮花山金乗院といいい中野宝仙寺の末寺であったが後に、神靈山金乗院と改め護国寺の末寺となった。

江戸時代には近辺の木之花開耶姫社などの別当であったが、昭和二十年四月の戦災で本堂等の建物、水戸光圀の手になるという「木花開耶姫命」の額などの宝物も焼失した。現在の本堂は昭和四十六年に再建されたものである。

目白不動堂は以前、文京区関口にあったのであるが、昭和二十年五月の戦災により焼失したため、本尊の不動明王像を金乗院に移して合併したのである。

不動堂は元和四年(1618)に小池坊秀算によって建立され、東豊山浄竜院新長谷寺と号した。本尊の不動明王像は、目黒・目赤などの五色不動の一つであり、目白の号は寛永年中(1624-1644)に三代将軍徳川家光の命によるといわれる。

墓地には丸橋忠弥・「青柳文庫」の青柳文蔵などの墓があり、他にも庚申塔などが多くみられる。

昭和五十六年三月 東京都豊島区教育委員会

目白不動金乗院略縁起 (パンフレットより)

金 乗 院

当院は神靈山金乗院慈眼寺と称し、開山永順が本尊聖観世音菩薩を勧請して観音堂を築いたのが草創とされる。永順は文禄3年(1594)6月示寂であるから、当院はそれより以前の創建と考えられる。はじめは蓮花山金乗院と称し、中野宝仙寺末であったが、のちに神靈山金乗院と改め、大本山護国寺末となった。またこのあたり旧砂利場村の社地三、四ヶ所とも、みな金乗院が別当であった。特に此花咲耶姫社の別当として名高い。しかし本堂等一切の伽藍および此花咲耶姫の御額(水戸黄門光圀御筆)等の宝物は、昭和20年4月13日の戦災ですべて焼失した。本尊は金銅仏の聖観世音菩薩、高さ1寸8分、毗首羯磨作と伝えられる。現在の庫裡・客殿は昭和27年に、本堂は昭和46年にそれぞれ再建されたものである。また当院は江戸三十三観音霊場第十四番札所、弘法大師御府内霊場第三十八番札所である。

目 白 不 動 尊

目白不動堂は東豊山浄滝院新長谷寺と号し、金乗院より東へ約1キロメートルほどの高台、文京区関口駒井町にあったが、昭和20年5月25日の戦災にて焼失したため、金乗院に合併し、本尊目白不動明王を金乗院に移した。新長谷寺は奈良県桜井市真言宗豊山派総本山長谷寺末であり、本尊目白不動明王は江戸三不動の第一位、東都五色不動の随一として名高い。本尊不動明王は弘法大師作と伝えられ、高さ8寸、断臂不動明王といい秘仏である。断臂不動明王は縁起によれば、弘法大師が唐より御掃朝の後、羽州湯殿山に参籠された時、大日如来が忽然と不動明王のお姿となり、滝の下に現われて、大師に告げて、「此の地は諸仏内証秘密の浄土なれば、有為の種火をきらえり、故に凡夫登山する事かたし、今汝に無漏の浄火をあたうべし」といわれ、持てるところの利剣をもって、みずから左の御臂(おんて)を切られると、霊火が盛んに燃えいでて、仏身にみちあふれた。そこで大師はそのおすがたを二体刻んで、一体は同国荒沢に安置し、一体は大師自ら護持されたという。その後、野州足利に住した沙門某が、これを感じて奉持していたが、武蔵国関口の住人松村氏が靈夢を感じて、本尊を足利よりお移して、地主渡辺石見守より藩邸の地の寄進を受け、一字を建立した。これが本寺の蓋幡という。しかしその年代は明かでない。その後、元和4年(1618)大和小池坊秀算僧正が中興し、二代將軍秀忠公の命により堂塔伽藍を建立し、また大和長谷寺の本尊と同木同作の十一面観世音の像を移し、新長谷寺と号した。寛永年中、三代將軍家光公は特に本尊断臂不動明王に目白の号を贈り、江戸五街

道守護の五色不動（青・黄・赤・白・黒）のひとつとし、以後は目白不動明王と称することになった。またそのあたり一帯を目白台と呼ぶこととなった。元禄年中には五代將軍綱吉公および同母桂昌院の篤い帰依を受け、たびたびの参詣があり、堂塔伽藍も莊麗を極めたが、惜しくも戦災にてすべて焼失した。本尊目白不動明王はみずから断ち切られた御臂（おんて）を衆生のために与えられる断臂護身明王として、すこぶる靈驗あらたかである。明治中葉釈雲照律師は境内に目白僧園をおこし、昭和初年小野塚与澄大僧正は豊山修道院を開設して、宗内子弟の訓育養成に努められた。また当寺は関東三十六不動霊場第十四番札所、弘法大師御府内霊場第五十四番札所である。

▲ 丸橋 忠 弥 の 墓

丸橋忠弥の本姓は、長曾我部^{はた}泰氏であったが、出羽山形出身の乳母の家丸橋氏を継いだ。宝蔵院流槍術の大家で、お茶の水に道場を設けて指南していた。慶安4年（1651）由井正雷^{きやう}と謀って幕府顛覆を企てたが、7月26日捕われ、8月10日鈴ヶ森で、磔刑^{はた}された。年37才^{てんごく}であったが、処刑後、一族がひそかに遺骸^{たいがい}を貰い受けて、紀州に埋葬し、のち一族の後裔^{こうい}である泰武郷^{はたなけに}が金乗院に移し、安永9年（1780）7月14日墓碑を建てた。

▲ 青柳 文 蔵 の 墓

青柳文蔵は仙台の出身で、字は茂明、号は東里であった。幼時から非常な学問好きで頭が良く、12才の時、詩を作るほどであった。18才の時、井上金峨^{きんが}の門に入り、刻苦勉強した。後、医術の修業に志し、研鑽^{けんくわん}を積み、その技術を身につけ医者^{いしや}を業とした。しかるに当時の社会は顛^{たひ}廢甚だしかったので、彼は正邪曲直を明かにし、紛糾^{まぎれあひ}をさばいたりしたので、報酬として得た財が莫大であった。天保2年（1831）彼はこの財産で二万巻余の書を集め出身地仙台の百騎町に日本最初の公開図書館「青柳館文庫^{せいりゅうくわんぶんこ}」をつくった。これらの書物は戊辰の役の後、そのほとんどを散逸してしまったが、彼の名は現在も残っている。当院にある追悼碑には彼の多くの友人のひとり太田蜀山人^{しやうじん}の書で、文蔵の辞世「残るべき身は逆さ井のわたし船、さし潮もあり引く潮もあり」と彫られている。文蔵は天保10年（1839）3月14日賊に刺されたきずがもとで他界、年79才であった。夫人新倉氏は高田村の人であったので、ともに金乗院に葬られることになった。

▲ 俱利伽羅不動 庚申

寛文6年（1666）に建てられた、不動明王の法形^{はうけい}を現わした庚申塔。そのおすがたは大変珍しいものである。

▲ 鐮 塚

寛政12年（1800）に建てられた、刀剣の供養塔である。

〔俱利伽羅不動庚申塔〕

- ・俱利伽羅不動---俱利伽羅龍王ともいい、岩の上で火焰に包まれた角のはえた黒龍が剣に巻きついて、それを呑もうとしているさまをあらわす。俱利伽とは、インドの伝承では頭に半月を戴く黒褐色の竜王であるという。剣は不動明王の利剣をあらわし、竜王は不動明王の化身ともされる。俱利伽羅不動は 不動明王の法形をあらわしているという。



また、「不動明王をもって行場の主尊とする修験者が、その場を多く深山幽谷の滝などのある所に求めたところから、不動明王本来の火焰光背の中に住む黒竜が水神としての竜神と習合して、独自の信仰となった」(大護八郎著「石神信仰」という。

- ・この石仏は寛文六丙午年(1666)二月九日に建立されたもので、三猿をともなっているのが庚申塔である。このころの庚申塔の本尊はまだ、さまざまなのがみられることから、本尊の庚申さまを俱利伽羅不動としているのであろう。珍しい庚申塔である。

11. 南蔵院

南 蔵 院

真言宗豊山派に属し、古くは大鏡山薬師寺南蔵院といった。

寺伝によれば、開山は室町期の円成比丘。本尊は、薬師如来。木造の立像で、奥州平泉藤原秀衡の持仏といわれ、円成比丘が諸国遊化のとき、彼の地の農家で入手し、奉持して当地に草庵を建て安置したのが開創である。

境内には、彰義隊の首塚、山吹の里弁財天の碑があり、墓地内には、片男波、条川、雷、二子山、花籠などの力士の墓がある。

なお、三遊亭圓朝作の「怪談乳房樓」に描かれた寺でもある。

昭和五十二年三月 東京都豊島区教育委員会

なお、「怪談乳房榎」の榎は、板橋区の赤塚の松月院山門前にかつて古墳があり、古榎ふるゑが生い繁さかっていた。その古榎から円朝はヒントをえたという。(第116回史跡めぐり資料p9を参照)

〔高田氷川神社〕

高田氷川神社

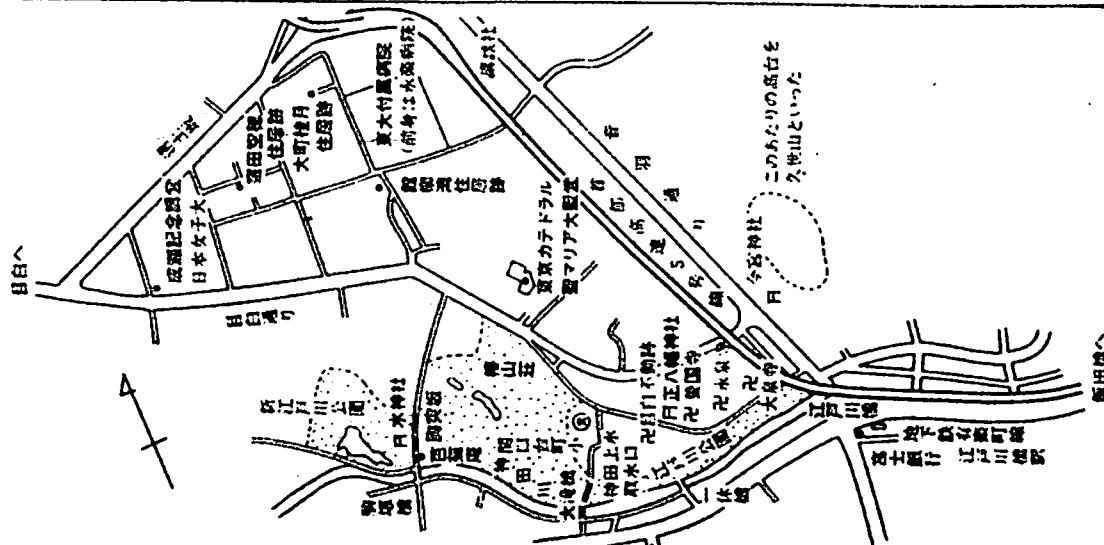
高田氷川神社は下高田村の総鎮守であり、武蔵国一宮の氷川神社(埼玉県大宮市)から当地に分霊したことによりはじまるといわれる。

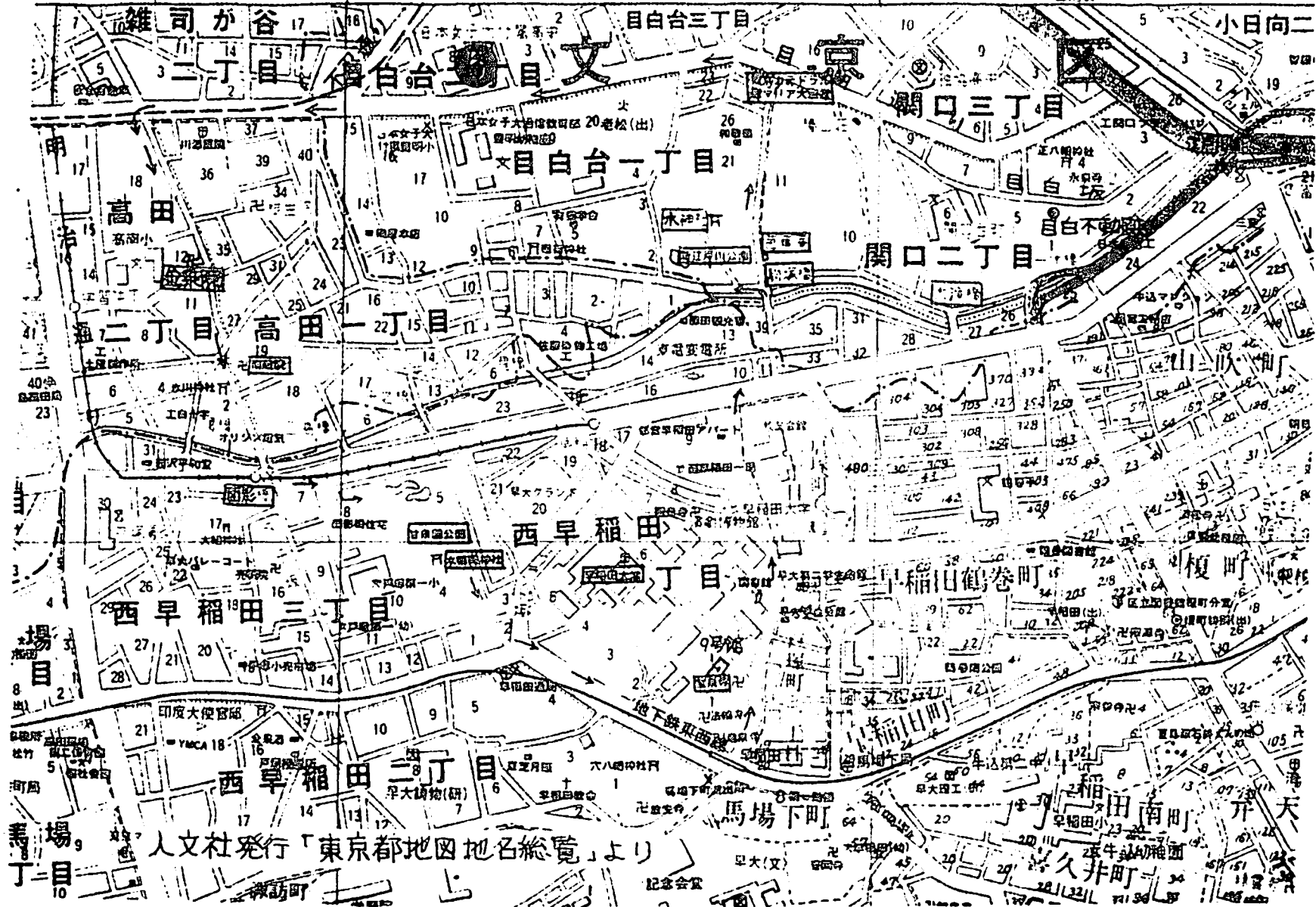
祭神は素盞鳴命すさのみのみこと・奇稻田姫命くしなだひめのみこと・大己貴命おほおろしのみこと(大国主命おほくにぬしのみこと)の三柱である。素盞鳴命が主神であるため、俗に「男体の宮」といわれ、奇稻田姫命を主神とする落合(新宿区下落合)の氷川神社の「女体の宮」と双方合わせて「夫婦の宮」といわれている。

氷川神社の創建の時期は明らかではないが、『江戸名所図会』などの江戸時代の諸書に記載がみられ、とりわけ毎年正月の祭礼の日に行った「奉射ほうしゃの式」が知られていたようである。

境内の建物や宝物などは昭和二十年四月十三日に戦災のため焼失してしまった。現在の社殿は昭和二十九年に再建されたものである。他に境内には高田姫稻荷社・道祖神などがある。

昭和五十六年三月 東京都豊島区教育委員会





人文社発行「東京都地図地名総覧」より

諏訪町

記念会堂

早大(文)

早大工

早大(文)

早大(文)

早大(文)